

'17

前期日程

## 国語小論文（教育学部）

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は一冊（六頁）、解答用紙は二枚、下書用紙は二枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、出題の都合により、本文には一部省略した箇所がある。

### 漢字の長所

漢字というのは表意力が強いので、イメージを湧かせるのに向いています。たとえば、「わしづかみ」という語があります。これを「鷺掴み」とすると、鷺が鋭い爪で獲物をがしつと「わしづかみ」する様子が想起され、意味が明確に伝わります。

花の「あじさい」と鳥の「あじさし」は文字にするとほとんど違いがなく、混同しがちですが、漢字で「紫陽花」と「鱒刺」と書く、意味が明確に伝わります。とくに、鳥の「鱒刺」は、上空から海面に頭から一気に飛びこんで、魚のアジを一刺しで捕らえる様子が文字に表れ、これならば意味を忘れなさそうです。

ほかにも、「いれたてのコーヒー」は、「淹れたての珈琲」とするだけで、香りと味がアップしそうです。「ひっぱりだこ」も、「引つ張り蛸」とすると、人気者の蛸が八本の足を四方八方から引かれている様子が目に浮かびますし、「引つ張り凧」とすると、大空を舞う凧がやはり糸であちこちから引かれている様子を想像することができます。両方とも間違いではないのですが、語源的には「蛸」のほうが「凧」よりも古いと考えられています。

さらには、物作りの職人「たくみ」は、動詞「巧む」の連用形に由来しますが、技巧の「巧み」か、細工の「工」か、意匠の「匠」かでイメージが違ってきそうです。ただ、いずれでも、美を作り出す「たくみ」の技がいつそう引き立ちます。

同音異義にたいする同訓異字というものをご存じでしょうか。「堅い」「硬い」「固い」のように、同じ訓を持つ異なる漢字の組み合わせです。

たとえば、「合併で会社が大きくかわる」では、変化なので「変わる」が、「部長にかわって出席する」では、代理なので「代わる」が、「我が社のトップがかわる」では、交替なので「替わる」が使われます。このように、「かわる」という同じ語が、どのような漢字を選ぶかで、意味が違って見えるわけです。これが同訓異字の力です。「暑い」と「熱い」、「暖かい」と「温かい」の区別なども同訓異字によるものです。

## 漢字の弱点

一方、漢字の弱さは音声です。もちろん、読めなくても意味は何となくわかるので、それで何とかなってしまう場合も少なくありません。

次の傍線部の漢字はどのように読むでしょうか。

① 相好を崩す      ② 毒舌の友人      ③ あなたとの続柄      ④ 写真の貼付欄      ⑤ コンピュータの筐体

答えを順に示すと、①「そうごう」、②「どくぜつ」、③「つづきがら」、④「ちようふ」、⑤「きようたい」です。

①を「あいごう」、②を「どくじた」、③を「ぞくがら」、④を「はりつけ」、⑤を「くたい」のように読んでしまう人もいるのではないのでしょうか。もちろん、そう読んでも、意味さえわかっているならば、最低限の理解は可能です。しかし、それでは、いざ声を出して読んだときに恥ずかしい思いをさせていただきますし、漢字によっては誤解を生んでしまいます。

たとえば、「紙魚」「衣魚」をご存じでしょうか。「しみ」と読みます。茶色がかった薄い銀色をした虫で、本を食い荒らすことから「紙魚」、衣類を食い荒らすことから「衣魚」と表記されます。なかなかうまいネーミングだと思いますが、初めて見た人は、読み方がわからないために、魚の仲間かと思ってしまうおそれがあります。

また、「生物」も注意が必要です。「せいぶつ」と読ませるのはよいのですが、「いきもの」「なまもの」と読ませたいときは避けたほうがよいでしょう。「いきもの」は「生き物」、「なまもの」は「生もの」が安全だと思います。

「表面」や「空缶」も要注意です。「表面」は、「ひょうめん」ならばこう表記するしかないでしょうが、「プリントの表面」のような場合は、「おもて面」のほうが安全です。「プリントの表面」をなでも、すべすべしているだけで字は読めません。

「空缶」は、通常は「あきかん」と読むと思われるのですが、ビール工場に見学に行ったときに、「くうかん」と読むということを知りました。液体が入るまえのものは「くうかん」、液体を飲んだあとのものは「あきかん」という区別があるのだそうです。そこで、「あきかん」と読ませたい場合は「空き缶」と送り仮名をあいだに入れたほうが、誤解がなさそうです。

漢字のクイズによく出てくる、漢字表現の和語副詞も読者泣かせです。次の漢字はどのように読むでしょうか。

⑥ 固より

⑦ 偏に

⑧ 徒に

⑨ 頗る

⑩ 強ち

⑥は「もとより」、⑦は「ひとえに」、⑧は「いたずらに」、⑨は「すこぶる」、⑩は「あながち」です。

「徐に」「専ら」「挙って」「予て」「頻りに」は、順に「おもむろに」「もっぱら」「こぞって」「かねて」「しきりに」と読み、これらも難しいのですが、それでも漢字が意味を引きだす手がかりになります。しかし、⑥から⑩のようなものは、漢字から意味を引きだすのがかなり難しく、漢字表記がマイナスに働く例です。

また、同音異義語が多いのも漢字の泣きどころです。「とうきは……」と言われても、状況に合わせて漢字を想起しなければなりません。飛行機のなかでは「当機は」でしょうし、経済新聞を読んでいるときは「投機は」でしょう。ゴミの話題ならば「投棄は」でしょうし、お金持ちのリビングでは「陶器は」でしょう。不動産会社では「登記は」でしょうし、寒い地域では「冬期は」でしょう。

漢字の表意力が強いのも、ときには曲者くまものです。中国人は日本語についての知識がなくても日本語の文章がある程度読めますし、日本人も中国語の知識がなくても中国語の文章がある程度読めます。しかし、有名な「手紙」(トイレトペーパー)や「汽車」(自動車)の例からもわかるように、意味の違う言葉もたくさんあります。

私自身は、中国人相手のときは、日本語ができる相手であっても、「ご自愛ください」という表現を避けるようにしています。それは、中国では、乱れた生活をしている人に、「もっと自分を大切にしなさい」と、慎むように言うときに使う言葉だからです。

中国に行ったとき、中国人の大学の先生に、観光地の旅館にあった中国語「日式湯屋」の写真を見せてもらったことがあります。もちろん「日本風温泉」という意味なのですが、そこに記されていた日本語の訳語は「和風のスープ屋」でした。たしかに中国語の「湯」の第一の意味は「スープ」です。日本語を知らない人が訳したのでしょうが、辞書の怖さを痛感する例です。

また、その漢字が派生的意味を表す場合、漢字を使わず、片仮名を使ったほうが意味を取りやすくなります。

たとえば、「山が外れる」「骨をつかむ」「壺を外す」「鴨にする」は、「山」「骨」「壺」「鴨」という漢字からすぐに意味が想起される

わけではありません。そこで、「ヤマが外れる」「コツをつかむ」「ツボを外す」「カモにする」と書いたほうが、派生的意味を表していることがわかり、音から意味に結びつきやすくなるわけです。

このように、漢字は表意力の強い文字として意味の喚起に力を発揮する反面、その長所が弱点となる場合があります。それを補う意味で、平仮名や片仮名を上手に取り混ぜることが語彙力強化にもつながります。

（石黒圭『語彙力を鍛える 量と質を高めるトレーニング』光文社新書 二〇一六）

問 「漢字の長所」と「漢字の弱点」についての筆者の見解をまとめ、それに対するあなたの考えを具体的に語例を挙げて述べなさい。（八〇〇字以内）

次の文章は、和歌（短歌）の解釈に「演技」という視点を持ち込んだ評論である。読んで後の間に答えなさい。なお、出題の都合により、本文には一部省略した箇所がある。

齋藤茂吉も理想とした、素朴・雄渾ゆうこんを謳うたわれる古代の歌集『万葉集』なら、演技などとは無縁だろうか。いや、そんなことはない。

天皇、蒲生野かまふのに遊獵あそびする時に、額田王の作る歌

あかねさす紫むらさき野の行き標野しめの行き野守のもりは見ずや君が袖振る（万葉集・卷一・雑歌・二〇）

皇太子ひつぎのみこの答こたふる御歌 明日香宮あすかのみやに天の下治めたまふ天皇、諡おくりなを天武天皇といふ

紫むらさきのにほへる妹いもを憎にくくあらば人妻あなゆゑに我われ恋こひめやも（同・二一）

『万葉集』の初期を代表する歌人、額田王ぬかたのおおきみと大海人皇子おおあまのみこの、著名なやりとりである。一見すると、「人妻」である額田王に恋する気持ちを抑えがたい大海人皇子（後の天武天皇）と、それをいさめようとする額田王、という不倫の恋のやりとりに見える。しかしそれだと理屈に合わない。恋歌なら「相聞あひま」という部立ぶだて（分類）に入っているはずなのに、これは「雑歌ぞうか」に入っている。「雑歌」という部立は、『万葉集』では公的な歌が多く集められているところなのだ。そもそも、天皇の「妻」に皇太子が恋をしかけるような、危険きわまりない歌が、堂々と残されていることからして、不審きわまりない。そこでこの歌については、遊獵という公的行事の宴席の座興として、あたかも恋人どうしであるかのようにして二人が演じた歌だ、という意見が有力である。天智天皇の宮廷の重要人物である二人の、さしずめ息のぴったり合ったラブ・シーンの共演とも言えようか、さぞかし宮廷人たちも、興奮を抑えがたかったことであろう。

特殊な歌ばかりを取り上げて演技などと言われても疑問だ、和歌は詩であり、詩は真情を吐露するものだろう、演技とは現実とは違う虚構の行為であって、お前は和歌を嘘の産物だと言うのか、と叱られるだろうか。だが、多くの物語や小説と同様、和歌においても虚構と真実とは同居が可能である。むしろ、事実を詠んでいると見なされることの多い現代短歌で考えてみよう。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

戦後短歌で空前の大ヒットとなった歌集『サラダ記念日』の、タイトルの由来となった短歌である。この著名な一首に対し、作者俵万智氏自身が、『短歌をよむ』という本の中で、その制作過程の内幕を明かしている。俵氏によれば、歌われている内容に類似する経験は確かにあった、しかし、褒められた料理はカレー味のから揚げであり、その日は「七月六日」でもなかった、と言うのだ。事実に即した初案の「カレー味のから揚げ」「六月七日」では、言葉としての意味や音調がどうしても重い。重いと、あの時自分が感じた思いが正しく伝わらない。だから推敲して今のように変えた、ということのようだ。真実を表すためには、かえって嘘をつかなくてはならない、と言えばよかるうか。作者は、男性にサラダを食べさせる女性を演じることで、自分の体験を正しく取り戻したのである。

（渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書 二〇〇九）

問 傍線部の主張をふまえ、文学における「虚構と真実」の関係について、あなたの考えを、事例に即しつつ述べなさい。

（四〇〇字以内）